

Richard Sennett, *Flesh and Stone*

その3: The Cloak of Darkness

2008年度大学院講義 後期

鈴木繁夫

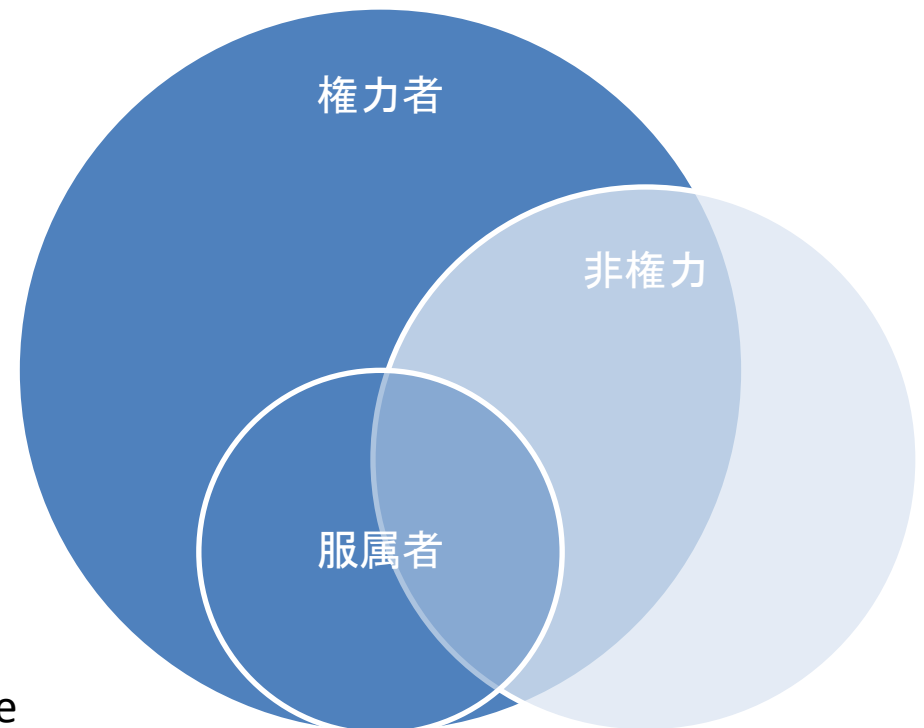
冷たい身体

- 女、奴隷、外国人→死者→暗闇
 - 抑圧された者たち→サバルタン
 - 苦を受動的に受けることを拒む→苦を与えるものへの積極的な反撃
- 儀礼
 - 生じた新たな必要 に対応する調整機能
 - 農耕社会での女性優位 vs 都市社会での女性劣位
- 女性優位の儀礼
 - 豊穡儀礼テスモフォリア祭(Thesmophoria)
 - アドーニア祭(Adonia)

超越論的立場

- 非権力による、責任を引き受ける偽装
- 権力 vs 服属者(Subaltern)

- **非権力 vs 服属者**
「これは、中心と周辺へと二極分解していく資本主義的な世界システムの生み出す悲惨である。われわれもこの同じシステムの中に組み込まれている以上、システムの鉄の法則によってがんじがらめになっているのであって、あのスラムのストリート・チルドレンと同じ悲惨を分有しているのだ」



http://blog.goo.ne.jp/rebellion_2006/e/cf400f10f78ec487ef6e3f05a1a528ce

豊穰儀礼テスモフォリア祭 θεσμοψόρια

- 地母神デーメーテル
 - デーメーテルが娘ペルセポネーの死を弔う
 - テスモイ＝下に置くこと＝定めること
- 儀礼の手順
 - 第一日：ギリシア犠牲獣小豚を屍殺する→洞窟megaraに小豚の性器を入れる→性器が腐る→女たちが洞窟に入り、穀物の種と腐った性器とを混ぜこねる→洞窟から出る→特別な小屋で寝泊まりする
 - 第二日：女性が断食する→ペルセポネーの死を弔う
 - 第三日：穀物種入り性器を取り、後に土に埋める



Day 1: *Anodos*, 'the way up.'

This scene is reminiscent of the *Anodos* procession on the first day of the Thesmophoria. Although this scene derives from the pre-historic period, it depicts a scene quite similar to the action of the *Anodos*, where the women approach the cult area each carrying cult offerings and paraphernalia.

© 2001 Andrea Koinski and Barbara Olsen. All rights reserved.



This scene, adapted from a Classical period Athenian vase painting, commemorates the activities of the second day of the Thesmophoria festival, the day of fasting and mourning known as the Nesteia, 'fasting'. Depicted here is the seated Demeter, who has ceased all vegetation on earth out of grief for her missing daughter. During the festival, the participants reenact Demeter's grief by sitting on beds of reeds and other anaphrodisiac plants and fasting all day.

© 2001 Andrea Koinski and Barbara Olsen. All rights reserved.

都市化したテスモフォリア祭

- 自己統制へとテーマすり替える
 - 性的な交渉を祭り前と祭りの最中に行わない
 - 柳(反催淫剤)＋地面上での仮眠＋沈黙
- 女同士の絆を作り出す→女の特質
 - 暗闇のマント＋冷たさ＋死へ漸近
- 女の市民的地位を確定
 - ピュヌックス丘の後ろに小豚を埋めていた

プニュックス丘の政治討論



換喩

- Xを、ある共通項を媒介にして別種の何かであらわす
 - 例 船員＝鮫、船員＝カモメ
- 女性の換喩
 - 第一日：冷たさと受け身
 - 第二日：自己統制と忍耐
 - 第三日：威厳ある身体

ギリシアの家屋構造

- 中庭を囲みながら部屋がある
- 主婦・娘はグナイケイオン *gunaikeion* にいる
- 主婦・娘は接客するアンドロン *andron* に入らない



アドーニア祭はこのパターンを変える

- 主婦・娘は屋根の上にいる

アドーニア祭

- アドーニスは女性に性的快楽hedoneを与える
- 手順
 - 【祭り開始一週間前】レタスの種を蒔いた壺を家の屋根におく→水をやる→芽をふく→水をやらない→枯れる→「アドーニスの園」完成
 - 【祭り当日】徹夜で踊り・飲む・歌う→ギンバイカを燃やす→情欲を喚起



男性社会に適合するアドーニス祭

- 男性社会

- 離婚が容易にできた
- 少年愛が当たり前
- 妻の敵は他の女性

妻
夫の意志に
従属する存在

- アドーニス祭の変質

- 古代: 性的快楽による死 = 大地の豊穡
- ペリクレス: 土地の滋養は

人間(女)の苦しみが源泉

アドーニス祭vsシンポジア

- シンポジア: 男性・奴隷・高級娼婦
 - 一室内で許される情欲・感情の発散
 - ポリス内の礼儀がない
- アドーニス祭: 主婦と娘
 - 夜の暗闇のなかで、
見知らぬ女性同士が屋根の上で出会う
 - 自分の欲求・欲望を声に出す
 - 陽光ではなく暗闇が熱を発酵・発散させる

プラトンによる批判



一時的な快樂がもたらす不毛性

~~大地の豊穡~~

比喩

- Xとは本来異なった別なものを結びつけ、Xの意味を複合化していく
 - 例 「バラの指をした暁」(ホメーロス)
- 比喩を喚起するアドーニス祭
 - 前提: 出産が女の性欲を肯定する
 - 性欲肯定の範囲を広げる

夜＋屋根＋見知らぬ人＋枯れた葉の壺

→比喩を喚起、理性的分析の拒否

→新たな身体の使い方(レズビアン)

→都市秩序の条件からはみ出しを一過的に許す

儀礼の役割

- 儀礼は癒す
 - 社会で抑圧される者たちが受ける屈辱への応答
 - 人間の生きる苦しみや死を耐えうるものにする
- 儀礼は社会における「型」を提供する
 - (1) 受動的な犠牲者ではなく、積極的な行為者として、
 - (2) 自分が受け入れられていないことに向かって対処する
- 知と理性が投げかける疑い = 反儀礼
 - 儀礼の根幹 + 換喩と隠喩の余地 + 祭りの身体運動

ロゴス vs ミュートス μῦθος

- ロゴス
 - 語源「集める」legein
 - 断片的な証拠を集めていく
 - 「疑っている聴衆の前で説明する」logon didonai
- ミュートス
 - 語源「責任は免除されながらある物語をする」
 - 「これは私の話ではなく、あるところでこういう話を聞いたのです」ouk emos ho mythos

ロゴス

- 物事を結びつける

- 疑っている聴衆→話し手のロゴスは不純

- ∴話し手による表象を用いて

- 聴衆から共感と事実確認を話し手は手に入れる

- 純粋な演繹的分析の吟味には耐えない

- 話し手は自分の言葉と同一化する

- クライステネース

表現と討論の自由は、語る言葉について、
語った人々が責任を取る場合にのみ有効である。

- プニックス丘では、誰が発言し、誰が賛成したかがわかる

ミュートス

- 言葉への責任はない

- 一時的に信じる聴衆 : a willing suspension of disbelief

- ↑

- 【鈴繁：無理のある議論】

- プラトン『パイドロス』

- 「君は君自身をわかってるの？昔の神話がばかばかしいってわかれば君は君自身をわかるというの？自分自身なんてわからんもんなんだという信念がソクラテスにはあったのだ。神話なんていうのが信じるものかなんてこたえられやしない。」(小林秀雄『本居宣長』付録)

民主制度と祭りの対照

- 民主制度
 - 言葉は、不信を回避し操作するための手段
 - 相互不信の中で、あからさまに身体をみせることで成り立つ
- 神話儀礼
 - 言葉(非個人的)にたいする責任はない
 - 神話が、呪術空間において信頼と連帯を生む
 - 言葉は身体の運動によって完成する
 - 身体は新しい価値を受ける

民主制度と祭りの対照

- | | |
|-------------|-----------|
| • 熱い身体 | 冷たい身体 |
| • 裸体の男性 | 着衣の女性 |
| • 光のある戸外 | 暗い洞窟と夜の屋根 |
| • 説明を行う | 癒しの話 |
| • 権力としての身体 | 抑圧された身体 |
| • 言葉による内部分裂 | 話による連帯 |

自己統制喪失

機能する民主制度と神話

- トゥーキューディデース『歴史』
 - ペリクレス演説後、数ヶ月でコレラの蔓延
 - 民主制崩壊、儀礼による連帯破滅
 - 死者への軽視、性的快楽への耽溺
- ペリクレスへの糾弾
 - ピラエウスの双璧に閉じこめられる市民
- 都市への奉仕
 - 兵士は戦い、死をもって、都市に奉仕したと信じていた
 - 女たちは、祭りに参加し、ペルセポネーやアドーニスたちの死が都市の女の欲求に奉仕していることを確認した
 - オイディプースは自己犠牲が都市を救うと信じていた

危機に機能しない制度と神話

- コレラ

- 市民と非市民との区別撤廃→民主主義不全
- 神話儀礼は人間の限界を教える→絶望する人間の生産
- 神話は

すでに存在しているもの、自分の外部にある何かに
に参入する→ ~~理性的な状況判断~~

~~状況への新たな理解と対処~~

- 混乱する解釈
 - ペリクレスは「傲慢」hubrisだ

創成poiesis

- Auto-poiesis

自己創成し、自らの変質させていくこと

→都市に危険をもたらす

↑

神話儀礼が、実験・疑義・討論に曝されない場合も同じく、都市に危険

- 紋章的身体＝文明化された創造物

- ギムナジウムで鍛える身体、少年愛が成り立つ身体、鍛えられ曝される声、劇場を政治の場に変えること

- 医学的にも透視法的にも正しい身体として描かれない

換喩と隠喩が身体と都市空間を貫く創造